

斎藤茂吉研究：詩法におけるニーチェの影響

前田，知津子

<https://doi.org/10.15017/1470511>

出版情報：九州大学，2014，博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名 : 前田知津子

論文題名 : 斎藤茂吉研究——詩法におけるニーチェの影響——

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、歌人斎藤茂吉（明治15年～昭和28年）の生涯にわたってその作品に影を投げかけたドイツの哲学者ニーチェ（Nietzsche, Friedrich Wilhelm 1844-1900）に照準を定め、茂吉におけるニーチェ受容の様相を考究するものである。

茂吉は、第一高等学校時代（明治35年9月～38年7月）に作歌の道に入った。当時の時代思潮を反映するように、その作品には西洋的なものが認められる。便宜上、東洋的と西洋的とに二分すると、東洋的側面としては、万葉集や仏典からの影響が指摘できる。この方面に留意した論文は枚挙にいとまがない。西洋的側面としては、ゲーテやニーチェなどへの言及が挙げられる。これらは、当時、多くの青年たちが接近した「教養」範疇であるが、茂吉におけるニーチェに関して言えば、それは単なる「教養」に留まらなかった。しかし現状は、茂吉に対するニーチェの関係が一般に認知されているとは言いがたい。したがって、短歌作品の理解についても、明らかにニーチェと分かる数首を除いては、ニーチェを視野に入れた解釈・鑑賞は未開拓の分野に属している。

本論文は、茂吉のニーチェ受容を解明することで、従来の研究で明らかにされている茂吉における東洋的な要素とは別の、西洋的な要素の側面を闡明し、茂吉の全体像の構築に寄与するものとなる。その結果、展望として、ニーチェを念頭においた茂吉作品の読みが可能となり、読みの可能性の拡大が期待される。

本論文は、序・本論（Ⅰ～Ⅷ：全8章）・結の構成である。

序章では、茂吉におけるニーチェの重要性を述べ、ニーチェを視野に入れた茂吉研究の状況を取りまとめる。その上で、本研究の目的、研究方法などを提示し、各章の概要を述べる。

第Ⅰ章「高山樗牛を介した茂吉のニーチェ受容——樗牛への共感に注目して——」では、同時代の多くの青年たちに受け入れられた高山樗牛に注目する。茂吉は、自身の体験を樗牛のそれと重ね、深い共感をもって樗牛の文章に接した。茂吉の樗牛言及を踏まえて、樗牛を介した茂吉のニーチェ受容の一端を明らかにする。

第Ⅱ章「写生説の形成——ニーチェの芸術観の関与——」では、大正9年9月に発表された「実相に観入して自然・自己一元の生を写す」（「短歌に於ける写生の説」）という茂吉の写生説が、ニーチェの芸術観を踏まえて構想されたことを検証する。

第Ⅲ章「茂吉におけるディオニュソス」では、茂吉の使用する「ディオニュソス的」の語について考察する。茂吉は、柿本人麻呂を論じる際にこの語を強調した。いかなる意味をこめて茂吉はこの語を用いたのか。長谷川如是閑の人麻呂論に対した場合と、当時の社会不安に対した場合との二つの側面から検討する。

第Ⅳ章「Wille zur Macht——茂吉の訳語「多力に向ふ意志」を視座に——」では、茂吉の「力」への憧憬に注目する。ここでは、「多力」という訳語の由来を通して茂吉におけるニーチェ受容を考察する。あわせて「紅血流通」（ニーチェの詩語の茂吉訳）の試みが作品の上に実現されていく過程をたどる。

第Ⅴ章「歌集名「暁紅」に込められたもの——*Morgenröthe*を機縁として——」では、第11歌集（昭和15年）の表題とされた「暁紅」（ニーチェ *Morgenröthe* の書名の茂吉訳）の語に注目する。茂吉のリグ・ヴェーダ受容と昭和9年における一女性との出逢いを考量し、歌集名「暁紅」には、単なる自然現象に留まらない女神のイメージが付与されていることを論じる。

第Ⅵ章「「古代芸術の讃」における茂吉の操作——保存された「多力にむかふ意志」——」では、ニーチェの『偶像の黄昏』を踏まえて書かれた「古代芸術の讃」（昭和21年発表）に注目する。大正2年に著者が与えた訳語「多力に向ふ意志」が現われるこの文章を、生田長江の翻訳と対照しつつ分析する。

第Ⅶ章「回帰する茂吉——『つきかげ』から『赤光』へ——」では、明治45年と昭和24年作中に現われた〈犬の長鳴き〉という題意の歌に注目する。これまであまり論じられることのなかったこれらの歌が『ツァラトゥストラ』第三部「幻影と謎」の章の影響下に成立した作品であることを論じる。

第Ⅷ章「遺稿集『つきかげ』巻軸歌を染めた夕映え——ニーチェから鷗外、そして茂吉へ——」では、遺稿集『つきかげ』（昭和29年）の巻軸歌に注目する。ニーチェの「芸術の夕映え」（『人間的、あまりに人間的 I』）を引用した鷗外の「追儼」（明治42年）、そしてそれに触れた茂吉の「節分」（昭和25年）を考察対象とし、当該歌に表現された茂吉の晩年の天上を染めた夕映えが、茂吉の目にどのように映じていたのかを明らかにする。

結章では、茂吉においては、ニーチェは生の深いところで受容され、かつ、それが決して一過性のもものではなかったことが論証されたことを強調する。その上で、ニーチェを念頭においた茂吉短歌の解釈を試みる。

【※2,000字程度でまとめること】

（比甲様式6）